

ゾンビと概念変化

1. ウィトゲンシュタインとゾンビ

ゾンビの不可能性を示すためには、ゾンビの可能性から矛盾を導き出すか、ゾンビの想定自体が意味をなさないことを示すか、の二つの方法がある。ウィトゲンシュタイン流のゾンビ批判ならば後者となるであろうが、両者は実は同じコインの裏表である。矛盾しているなら有意味にならず、有意味性の限界においてあえてそれが意味をなす、と仮定すればそこから容易に矛盾が導かれるからである。ここではそのウィトゲンシュタイン的アプローチで点滅論法を補完したい。

水本（2012）第7章の『探究』第420節の引用、およびその周辺の議論は、あたかもゾンビを想像することが可能であることを認めているように思われるかもしれない。しかし、むしろ結論は逆である。ゾンビが想像可能に思えてしまう第1の原因は具体性の欠如である。ゾンビの想像不可能性を実感するために、我々はウィトゲンシュタインが言うようにもっと具体的に、日常の会話の途中で相手がゾンビであると想像してみればよいのである。血が通った、感情を持つ（ように見える）、通常の意味で命題的態度と知能を持つ目の前の対象がゾンビであると本当に想像することができるのだろうか。そこにおける大きな抵抗こそが、我々がゾンビを想像することの困難そのものなのである。

ここで「見え」の違いが概念の違いを含意することを思い出そう。人をゾンビとして見るときには対応する「見え」が存在しないのであり、それが概念の欠如を示している。ゆえにゾンビが想像できない、ということは単なる「難しさ」という程度の問題以上のものである。「意識がない」ものとして、我々は人間と物理的に同じ対象を想像しなければならないわけで、そのときどんなものを想像しなければならないか、を我々はそもそも知らないのである。ゾンビと言いながら実は中身が機械でできたロボットを想像していたり、叩いても刺しても無反応な特殊な障害を持つ人間、本当は心ここに在らずなのに演技している人間、などを想像していたりではゾンビを想像していることにならない。こうした可能性をすべて排除した上で、それでも自分はゾンビを想像できている、とどれほどの人が自信を持って言えるだろうか？そもそも意識のある普通の人間を想像するとき、人間と物理的に同じ対象以上の何を想像しなければならないか、我々は分かっていないのである。

あたかもそうした世界を想像しているように思われるとしても、本当にそうした世界を想像しているのかは、決して明らかではない、というのが「水=H₂O」の必然性を示すクリプキの古典的な議論であった。あるいはウィトゲンシュタインの「太陽で今5時」という例でもいいだろう。もちろん「太陽で今5時」という状況はいくらでも考えられる。太陽についての時刻が定義された世界を考えればよいのである。だがそれでは我々のもとの主張に反論したことにならない。そこでは時刻（特に地球の外の）についての概念が変わっ

てしまっているからである。同様に、「生き生きとした表情で今日の学校での出来事を話す子供が実は意識を欠いている状況」というものを想像できるという人は、「意識を欠いている」ということがどういうことかを、それゆえ「意識」概念自体を、一般人と共有していないのである。そのような子供が意識を持つ、ということは明らかに「意識」という語の一次内包の、それどころかその本質の（後述）一部である。

同様に、勝手なクオリア概念を前提すればゾンビはトリヴィアルに可能となる。だが「オレのクオリア概念では（点滅に）気付かないことも可能だよ！」では反論にならないのは明らかだろう。何度も強調するが、クオリア概念を勝手に二元論者の意味で前提して反論する者は、そもそもゾンビ論法がどういう議論であったのかさえ理解していない。そして概念の規範性を無視してよいなら「水が H_2O じゃないことももちろん可能だ！」と言う学部生にも反論できないということになろう。「水」というものが我々が現在使っている語の意味での「水」でなければもちろんそれは可能である。形而上学的可能性についての問いはしかし、あくまで現在我々が持つ概念に基づく一次命題から出発せねばならないのである。

だが明らかに、点滅論法を批判するゾンビ論者の言う「物理的にも主観的にも特定できない何かとしてのクオリア」というものは針の先の天使と同じ類のものであり、そのような特殊な概念を一般人は直観的に持たない。よってそれが「ない」と想像したとしても、そこから消されたものが何か我々にはわからないのであり、それは要するに「ゾンビを想像するということがどのようなことか」について、我々は全く知らないということである。その意味でゾンビを想像可能だ、という主張は意味を欠いているのである。

それでも、それは一般人がテクニカル・タームを知らないだけであり、（日常言語の）意識は 3 人称的にも捉えられる本質を確かに持っているかもしれないが、クオリアは一人称的な側面にその本質があるため、会話の相手がクオリアを欠いている、ということは依然として想像可能である、という反論があり得よう。そしてまさにここで点滅論法による批判が役割を演じるのである。

2. 「我々のクオリアは点滅している！」への対処法

点滅論法に対するゾンビ論者のまともな反論は、「（我々には主観的には決してわからないが）我々のクオリアは 5 秒ごとに点滅している！」と現実世界で主張する人間は、我々と異なる意味で「クオリア」という語を使っている、という主張を批判することでしかあり得ない。そしてそれは、その狂人が我々とクオリア概念を共有しており、その文で有意味に（偽である）何かを主張できている、と論じることでなければならない。（ここで「そんなクオリア概念でもそれ自体は矛盾しているわけではない」などという反論は議論の論理構造を全く理解していないことに改めて注意してもらいたい。）

だがこの現実世界における「我々のクオリアは 5 秒ごとに点滅している！」という主張は「点滅している」という主張の内実が物理的には決して検証できないばかりか主観的に

さえ知ることができないわけであり、である。けれどももしこの主張が意味をなさないならば、「この主張が真であるような世界」というものも、これと同じ意味で使われている限り、無意味である。そもそも真理値を持たないのだから。実際上の主張は現実世界でさえ「偽」ではない。というのも、どんな主観的、物理的証拠を持ち出しても主張者は「そんな証拠は無関係だ」としてそれが真であると主張し続けることができるだろうからである。（注意せねばならないのは、これは半ゾンビの言明である必要はない、ということである。半ゾンビの言葉であれば、外在的意味論により我々の意味との違いをあげつらうことができるだろうが、ここではあくまで我々は我々の言葉を使って可能世界を記述しているにすぎない。）これは検証主義的有意味性の基準だ、という批判はここでは当てはまらない。というのも「これ以上の探究」というものがそもそもここでは存在しないからであり、むしろこれは数学なら証明が未だ発見されてない状況というより、独立性証明がすでになされた状況に例えられるだろう。ゲーデルとコーエンの証明の後で「ZFCで連続体仮説は正しい！」と主張することに意味はないのであり、そのような主張をする人は明らかに数学者の「正しい」という語の意味を共有していないのである。

だが、もしそれでもそんな主張が意味をなす、というのであればもはやそれは明らかに我々の意味での「クオリア」ではない。というのも今度はそのようなクオリア概念を前提すればクオリアについての「気付き得る」、「主観的にアクセス可能」、といった表現の意味、および「我々とは一人称的には全く異なる」というゾンビの定義的内容が空虚になるからである。それに対し、通常の「クオリア」という語ではそれらは意味を成す（定義の一部）とされてきた以上、やはりそれは我々のクオリア概念とは異なるということになる。ここでさらに「特殊な〇〇概念を前提すればそれらも有意味にできる」といった類の反論が反論にならないことはもはや言うまでもないだろう。

3. 概念の同一性

もちろん、異なる意味で「クオリア」を使っている、という批判は、それほど簡単なものではない。それは当然一次内包の意味での違いであり、その同一性の基準がまず示されるべきである、という反論ももつともなものである。確かに、恣意的に「それはもはやクオリアではない」と主張できれば、どんな反論も撃退できてしまうだろう。我々は、以下ではそのような基準としてチャルマーズ自身の提出するもの(Chalmers 2011)を検討し、それが概念の事実上の内容と規範的な内容(≠概念能力)の変化についてのジレンマに陥ることを示し、代わりにそれを自然な、そしてノーマルな信念変化のパターンに基づくものとして解釈し直すことで、「本質」というものを自然主義的に定義し直す。これはテクニカル・タームとしてのクオリアはともかく意識概念には適用可能であり、上のウィトゲンシュタインの議論の再構成ですでに直観的に使われていたと言える。

4. 概念変化と生活形式の変化

もちろん、意識概念やクオリア概念も歴史を通してずっと同じだったわけではない（後者がテクニカル・タームであったとしても）。よって例えば我々の意識概念が大きく変わるならば、むしろゾンビは簡単に可能となろう。だがむしろそれは、主観的に我々が決めることができるようなものではない。もしそうした変化が生じるとすれば、それは生活形式の変化の結果にすぎないであろう。だが、現在生じているそれらの概念の変化はむしろ（ウイトゲンシュタインにとっては遺憾なことに）物理主義的な方向へと向かっていると言える。代表的な例として、「植物状態の患者の意識」、「火星人のクオリア」というものが挙げられるだろう。それらの例から言えることは、意識やクオリアと脳との結びつきがますます確立されてきている、ということである。物理主義者にとってはこれは新たな対応が単に「発見」されているだけだ、ということになるだろうが、そうした形而上学的立場から中立に見て、それを概念の変化としてのみ捉えるとしても、こうした変化はゾンビの不可能性をますます強固なものにすれ、非物理的な特殊なクオリア概念への変化の方向を示唆することはないのである。